

Ⅲ. 各部門別の生産と販売の概要

1. 湯浅農場

1) 柑橘部門

担当：堀川勇次

(1) 概況

早生ウンシュウミカンの‘宮川早生’を約237 a, 普通ウンシュウミカンの‘林温州’を約35 a栽培している。樹齢は34～50年生で、古い樹は改植時期にきている。施肥、薬剤散布とも農用機械で行っているため、農用機械が走行できる通路を確保する必要があり、植栽本数は10 a当たり約120本と少ない。

(2) 栽培の概要

病虫害防除、施肥および除草剤散布実績は第2表、第3表および第4表の通りである。

第2表 病虫害防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病虫害名
1月18日	トモノールS	60	カイガラムシ類, ハダニ類
4月6日	ICボルドー66D	40	かいよう病
5月15日	アブロード水和剤	1,000	カイガラムシ類
	ロディー乳剤	2,000	アブラムシ類, シャクトリムシ
	ストロビードライフフロアブル	2,000	灰色かび病, そうか病, 黒点病
5月31日	エムダイファー水和剤	600	黒点病
	モスピラン水和剤	3,000	アザミウマ類, アブラムシ類
	アルパリン顆粒水和剤	2,000	カイガラムシ類, アブラムシ類
6月17日	ジマンダイセン水和剤	400	黒点病
	トモノールS	200	カイガラムシ類, ハダニ類
	スプラサイド乳剤40	1,000	カイガラムシ類, ゴマダラカミキリ
7月8日	エムダイファー水和剤	600	黒点病
	アドマイヤーフロアブル	3,000	アザミウマ類, アブラムシ類
	サンマイト水和剤	3,000	チャノホコリダニ, サビダニ
7月17日	クレフノン水和剤	100	日焼け防止
8月7日	ジマンダイセン水和剤	400	黒点病
	ハチハチフロアブル	2,000	アザミウマ類, サビダニ
	スプラサイド乳剤40	1,000	カイガラムシ類, ゴマダラカミキリ
8月30日	ジマンダイセン水和剤	400	黒点病
	ダニエモンフロアブル	4,000	ダニ類
	アドマイヤーフロアブル	4,000	カメムシ類, アザミウマ類
10月2日	リドミルMZ水和剤	750	褐色腐敗病
11月12日	ベフラン液剤	2,000	貯蔵病害
	ベンレート水和剤	3,000	貯蔵病害

第3表 施肥実績

施肥時期	肥料名・施肥量	NPK成分量(kg)
春肥 4月7日	特製ペレット160 kg/10a	N:7, P:8, K:4
元肥 10月26～27日	フィッシュプロテイン180 kg/10a	N:6, P:6, K:4
合計	340 kg/10a	N:13, P:14, K:8

第4表 除草剤散布実績

散布時期	農薬名	倍率	対象雑草
4月8日	タッチダウンIQ	100	1年生雑草, 多年生雑草
5月26日	プリグロックSL	200	1年生雑草, 多年生雑草
6月28日	ゾーバー水和剤	1,000	1年生雑草
11月2日	タッチダウンIQ	100	1年生雑草, 多年生雑草

(3) 収穫および販売状況

今年は夏に雨があまり降らず玉伸びが悪く、小玉傾向になった。糖度は11度前後と比較的高かった。収量は約70 tで、主に学内で販売し、ジュース加工にも使用した。

(1) 概要

‘アーウィン’をハウス20aで栽培している。マンゴーの開花時期が平年よりも5日ほど早かった。

(2) 栽培の概要

時期別作業内容、施肥実績、病虫害防除実績は第5表、第6表および第7表に示した。

第5表 時期別作業内容

時期	生育相	作業内容
1月上旬	花芽形成	除草(除草剤使用) 飛び花切除
3月下旬	出蕾期	花穂吊り上げ, 粘着トラップ設置
4月上旬	開花期	花穂吊り上げ
下旬	開花最盛期	受粉促進のためのミツバチ放飼(1か月間)
5月下旬	結実期	花弁落とし(灰色カビ病対策)
6月	果実肥大期	摘果, 果実吊り上げ, 遮光ネット被覆
7月上旬	果実肥大期	摘果, 果実吊り上げ
8月中下旬	収穫最盛期	収穫, 出荷
中旬	せん定期	せん定
10月	新梢充実期	芽かき

第6表 施肥実績

施肥時期	肥料名・施肥量	N, P, K成分量(kg)
3月19日	フィッシュプロテイン60 kg	N:7, P:7, K:5
	配合ブリケット 60 kg	N:8, P:5, K:4
5月22日	オーケイ加里 40 kg	N:3, P:15, K:7
9月15日	さざなみ 120 kg	N:8, P:12, K:10
9月25日	バイオ有機 216 kg	N:1.3, P:1.1, K:0.3
1月6日	苦土石灰 80 kg	
合計		N:21.4, P:25.2, K:24.2

第7表 病虫害防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病虫害名
2月4日	ジマンダイセン水和剤	800	炭そ病
	コテツフロアブル	2,000	スリップス類
	アルバリン顆粒水溶剤	2,000	スリップス類
3月2日	スピノエース顆粒水和剤	3,000	スリップス類
3月31日	スピノエース顆粒水和剤	3,000	スリップス類
	ベルクト水和剤	1,000	炭そ病
4月28日	モスピラン水溶剤	2,000	スリップス類
	ストロビードライフロアブル	2,000	灰色かび病
5月13日	モスピラン水溶剤	2,000	スリップス類
	ストロビードライフロアブル	2,000	炭そ病
6月7日	コテツフロアブル	2,000	スリップス類
	スミレックス水和剤	1,000	軸腐病
6月23日	アーデント水和剤	1,000	スリップス類
	アミスター10フロアブル	1,000	炭そ病
7月23日	アーデント水和剤	1,000	スリップス類
9月10日	ダントツ水溶剤	2,000	スリップス類
	サンマイト水和剤	1,500	ホコリダニ
	ストロビードライフロアブル	2,000	炭そ病
10月6日	モスピラン水溶剤	2,000	スリップス類
11月8日	ダントツ水溶剤	2,000	スリップス類

(3) 収穫および販売状況

収穫時期は平年より早かったが、収穫量は昨年度よりもたいへん少なかった(第8表)。出荷は市場であり、仲卸業者を通して大阪や神戸などの大丸百貨店で販売されている。今年度は昨年度と同様、小箱の学内販売を行った。

第8表 販売実績

年度	販売量(kg)
平成20年	512.8
平成21年	3063.1
平成22年	888.3

3) ウメ部門

担当：友廣教道

(1) 概況

面積20 aに南高梅31本，小梅15本を栽培している。

(2) 栽培の概要

病虫害防除実績は第9表の通りである。施肥は4月にアミノ3号を施用した。

第9表 病虫害防除実績

防除時期	農薬名	希釈倍率	対象病虫害名
3月12日	ICボルドー66D	50	かいよう病
3月26日	バリヤード顆粒水和剤	4,000	アカマダラケシキスイ
	マイコシールド水和剤	1,500	かいよう病
	スコア顆粒水和剤	3,000	黒星病
4月3日	スカシバコン		コスカシバ雄成虫
4月9日	モスピラン水溶剤	4,000	アブラムシ類
	ベルクート水和剤	2,000	黒星病
4月24日	マイコシールド水和剤	4,000	アカマダラケシキスイ
	マイコシールド水和剤	4,000	アカマダラケシキスイ
	オーソサイド水和剤	1,500	かいよう病
	バリアード顆粒水和剤	2,000	アブラムシ類
5月8日	スターナ水和剤	1,000	かいよう病
	ダントツ顆粒水和剤	2,000	アブラムシ類，ケムシ類
9月16日	スミチオン乳剤	1,000	アメリカシロヒトリ
	アブロード水和剤	1,000	カイガラムシ類
	スプラサイド水和剤	1,500	カイガラムシ類

(3) 収穫および販売状況

南高梅の収量は約1 t，また小梅の収量は約150 kgであった。

販売実績は第10表に示した。青梅として学内および地元の市場に販売した。南高梅および小梅ともに青梅販売で残った果実を塩漬けし，校友会，農学部祭および学内で販売した。さらに，梅干を作る段階でできる梅酢もあわせて学内で販売した。本年度からはパッケージを丸型から角型に変更し，南高梅については増量した。

第10表 販売実績

品種名	青梅 (kg)	梅干 (kg)	梅酢 (L)
南高梅	494.0	225.0	40.0
小梅	24.0	55.0	



写真 ウメの収穫時期



写真 梅干（新パッケージ）

4) 水稲部門

担当：中東 豊

(1) 概況

約160 aの水田に、「キヌヒカリ」130 a, 「イクヒカリ」30 aを栽培した。

(2) 栽培の概要

病虫害防除実績は第11表の通りである。5月11日に塩水選を行い、5月18日に播種を行った。発芽は順調であったが、フレイム出し以降の低温と日照不足により、近年になく生育不良であった。6月7日より田植えを始めたが、苗の丈は短く、根の張りも弱かった。田植え後は天候も回復し、生育は順調に進んだ。一部の水田に3～4年前よりジャンボタニシが発生し、今年は苗に食害がみられたため補植を行った。7月中旬の梅雨明け以降から9月14日の稲刈りを始めた頃までうだる様な猛暑が続いたため、「キヌヒカリ」、「イクヒカリ」とともに、乳白米が多くみられ、収穫も昨年より少なかった。

(3) 収穫および販売

個人販売に加えて、大学本部、農学部祭で約100 kgの玄米および白米を販売した（第12表）。

第11表 病虫害防除実績

種 類	防除時期	農 薬 名	希釈倍率・使用量	対象病虫害名
種籾消毒	5月11日	スポルタック乳剤	1,000	ごま葉枯病, いもち病
		バイジット乳剤	1,000	イネシンガレセンチュウ
除草（初期）	6月16日	イッテツ1キロ粒剤	1 kg/10a	一年生雑草等
		サスケーラジカル ジャンボ	10 パック/10a	一年生雑草等
除草（中後期）	6月30日	ハイカット1キロ粒剤	1 kg/10 a	一年生雑草等
病虫害防除	6月14日	スクミノン	4 kg/10a	スクミリンゴガイ
	6月27日	パダンバツサ粒剤	3 kg/10a	ニカメイチュウ等
	7月21日	パダンSG水溶液	1,500	ニカメイチュウ等
		バリダシン液剤5	1,000	紋枯病等
	8月5日	ブラシンフロアブル	1,000	いもち病, ごま葉枯病等
		トレボンEW	1,000	コブノメイガ ツマグロヨコバイ等
	8月23日	アプロード水和剤	1,500	ツマグロヨコバイ幼虫等
MR. ジョーカーEW		2,000	カメムシ類, ウンカ等	
	ブラシンフロアブル	1,000	いもち病, ごま葉枯病等	

第12表 過去3年間の玄米販売量および販売金額

年 度	袋数 (30 kg)	販売金額 (円)
平成20年度	260	2,034,000
平成21年度	257	2,010,200
平成22年度	238	1,904,100*

*：白米を含む

2. 生石農場

1) 黒毛和牛部門

担当 浦西章生

今回の出荷牛は、平成20年9月より肥育を始め、約18～20か月間で仕上げた（第13表）。平成22年5月9日に学内販売用として2頭、5月26日に大阪市食肉市場（大阪南港）に1頭を出荷した。さらに、7月1日に一般向け販売用として初めて1頭を出荷し、和歌山市内のフォルテワジマの鳥久精肉店で、期間限定の試食販売を行った（平成22年7月10日～15日、試食会は10、11日の2日間）。肉質はA5（BMS No. 9）であり、最上級の格付けであった。売れ行きは好調であったことから、販売を予定より1週間延長した。今回の一般販売により「近大おいし牛」の効果的なアピールができたと考える。

現在、平成21年9月に導入した黒毛和牛4頭（平成23年1月現在、23～24か月齢）と平成22年9月に導入した黒毛和牛2頭（平成23年1月現在、11～12か月齢）を肥育している。

第13表 黒毛和牛出荷状況

出荷日	販売先	出荷頭数	出荷体重 (kg)	枝肉重量 (kg)	格付	販売価格 (円)
H22年5月9日	学内	2頭	773	496.6	A4	2,259,000
			865	554.8	A3	(2頭分合計)
H22年5月26日	大阪市食肉市場	1頭	743	476.8	A5	973,106
					BMS8	
H22年7月1日	一般	1頭	823	538.3	A5	1,205,866
					BMS9	

注) 大阪市食肉市場での販売価格は同市場でセリ落とされた価格、学内での販売価格は農場販売価格、一般での販売価格は卸業者買取り価格を示す。



写真 フォルテワジマ食品館鳥久精肉店（和歌山市）での「近大おいし牛」一般販売。

左より販売先ブース、今回販売した牛肉（リブロース）、出荷牛（7/1, No. 9425）

2) 合鴨部門

担当 岩森明彦

(1) 合鴨肉の販売状況

今年度（1月～10月）の合鴨肉の売上げは、220,396円であり、昨年度より111,690円の売上げ増となった（第14表）。これは、平成21年度にパッケージのリニューアルを行ったことが影響したと考える。今年度は商品名称を「おいし鴨」から「近大おいし鴨」に変更し、大学附属農場としてアピールした。なお、販売先は有田川町の農林産物振興センターとあらぎの里を中心に行っている。

4月1日の入荷分の死亡原因は育雛時の温度管理であったと考える。今後は、ヒーターを使用して、冬期間の低温対策を厳密に行っていきたい。9月2日の入荷分の死亡原因は急激な発育による腹水症であった。個体毎（ロット）の食餌状況を診て、飼料の給与量を今以上に厳しく調整しなければいけないと考える。

第14表 合鴨出荷状況

入荷日	入荷孵化場	入荷羽数	飼育日数	出荷日	出荷羽数
平成22年 4月1日	高橋人工孵化場	42羽	70日	平成22年 6月9日	35羽
平成22年 9月2日	高橋人工孵化場	42羽	70日	平成22年 11月10日	36羽
平成22年 11月18日	高橋人工孵化場	42羽	予定70日	平成23年 1月26日(予定)	41羽 (予定)

注) 売上げ金額合計(平成22年1月～10月): 220,396円

(2) 料理メニューとしての合鴨肉の試験販売について

平成22年11月1日より、有田川町ふるさと開発公社(あさぎり:有田川町清水, 二川温泉白馬:有田川二川)で「近大おいし鴨」を使用した料理の試験販売を始めた(第15表, 写真)。販売は順調であり、平成22年12月20日現在、品切れ状態である。‘おいし鴨鍋’は現在売上げがないが、冬期間の注文は期待できる。年間2回の出荷を3回にし、需要対応していく予定である。

第15表 「近大おいし鴨」料理の売上げ状況(平成22年11月分)

おいし鴨井	おいし鴨 なんばん	おいし鴨 小鍋	おいし鴨 小鍋定食	おいし鴨鍋	やきとり
7食	15食	1食	21食	0	240本



おいし鴨井



おいし鴨なんばん



おいし鴨小鍋定食



やきとり

写真 「近大おいし鴨」を使用した有田川町ふるさと開発公社での料理メニュー

3) ミニブタ部門

担当 岩森明彦

ミニブタの分娩を3回行った。自然分娩と誘起分娩(ホルモン注射)の2種類で行い、妊娠日齢は平均115.7日、出産数は平均4.3頭と従来と同様であった。しかし、誕生後の死亡率(平均38%)が高かった。この原因としては、特に母豚による圧死が考えられたため、哺育時での観察頻度を多くして、事故が起きないように対応していきたい。

第16表 ミニブタ生産状況

出産日	出産数		離乳日
平成22年1月7日	♂ 3	♀ 3 (♀1 死亡)	2月4日
平成22年1月8日	♀ 5	(♀3 死亡)	2月4日
平成22年6月27日	♀ 2	(♀1 死亡)	7月23日

注) 1/7 自然分娩, 1/8 誘起分娩 (1/7にホルモン注射)

6/27 誘起分娩 (6/26にホルモン注射)